

中江藤樹・心のセミナーから

吉田公平先生の講演内容（後編）

『今、藤樹先生の教えをどう活かすか』

さて中江藤樹さんの生きた日本には、神道・仏教・儒教の三教がありました。藤樹さんは儒教徒の立場をとりまです。儒教の特色は修己・治人の二焦点論にあります。修己とは性善説を基礎にして人格を陶冶して、悪の世界から開放される事。救われること。治人とは社会の一員として政治的役割を果たす事。藤樹さんは武士をやめたので、治人（人を治める）には積極的関心を示していません。専ら修己が主題です。



藤樹さんは朱子学に生きる力の源泉を求めましたが、学ぶ中で疑問を覚え、陽明学に触発され、晩年は独自の藤樹学を發明したというのが通説です。此の事自体に異論はありません。

ちよつと気になることを三つ述べます。一つは村井弦齋さんが『近江聖人』で述べられていることです。お母さんが冬の寒い時に水仕事をし、アカギレになることを憂慮して、帰省するときにアカギレ膏薬をお土産に持ち帰ったという逸話です。此の事は藤樹さんの伝記資料にはありません。村井弦齋さんのフィクションです。しかし、この逸話は藤樹さんが親孝行であることを強く訴える上では抜群の宣伝効果を発揮しました。今は、村井弦齋さんがこの逸話を持ち込んだ歴史的意味を考える事が肝心です。暖房がなく水道が普及していなかった時代には、この「アカギレ膏薬」の逸話は広く共感を呼びました。

もう一つ注意していただきたいことがあります。中江藤樹の思想を王陽明の言説で理解しないことです。藤樹さんは王陽明の恩恵を受けましたが、鶴呑みにはしませんでした。子細にみますと、王陽明とは異なる主張が少なくありません。その一つが知行合一説です。朱子学では知が先、

行があと。知は軽く行は重いと、知と行を先後軽重に分けて説きます。王陽明は知と行は人間存在の有り様を便宜的に分けて説明するけれども、実体としては「分けられない」という意味で「合一」と述べました。朱子学の知行論は経験的に分かりやすい。王陽明の知行合一論は説明が拙くて誤解されやすい。藤樹さんはこの知行論は棚上げして論じていません。むしろ意味とか価値こそを問題にして、知行論の深みにはまることを忌避したのです。

第三には、性善説の問題です。朱子学も陽明学も性善説に立脚して論述を展開しています。晩年の藤樹さんは性善説ではなくして、性善悪混然説を取ります。朱子が『孟子集注』告子篇で告子の主張を漢代の楊雄の混然説であると弾劾した指摘に藤樹さんは啓発されたのでしよう。性善説ですと人間悪は後天的な作業ということになります。しかし、世間を見ると悪が後天的な作業であるということは納得できない。人間には悪行をしないでかす根本の原因が生まれながらの本性に先天的に、善性と共に同居しているのではないのか。楊雄の混然説を藤樹さんは採択したことになりました。人間の様態の複雑さを考えたとき、この混然説は了解しやすいい。それでは潜在する悪をいかに対

処するか。意志の力で、善の根を養生しながら、片や悪の根は根のままに潜在状態に押し込めて顕在化させなければよいと。この工夫を誠意説といいます。意を誠にする。この誠意説は藤樹さんの独創です。朱子学も陽明学も、本体は善なのですが、現場で作用すると、身体的要因に引き吊られ、社会の刺戟や誘惑に打ち負かされて、悪を結果させてしまふと。ですからもっぱら作用（はたらき）の現場で悪に対処することになります。この点は朱子が最も苦勞した課題でした。藤樹さんは、既に悪が結果した後に対処しても手遅れではないのか、と疑問を持ちました。「良く生きる」ことを主題にして生きた藤樹さんらしい疑問です。人間に付きまとう悪のしつこさを、単に後天的なもののみならず、悪の根は誰でもが先天的に持ち合わせていると、性善悪混然説を主張し、その悪の根を潜在のままに押し込める「意を誠にする」誠意説を主張したのです。人間の姿を見つめると、これだけ人が悪い事をしてしまうのは、その原因はその人自身にあるのだということです。明晰な説明だと思えます。

本性論、人間の生きる力の源泉は何か、ということについて、藤樹さんから少し離れてお話しします。私